

「底が突き抜けた」時代の歩き方 458

分断されるアメリカ - 米大統領選

フランスの人類学・歴史学者エマニュエル・トッドは、「世界の混乱と無秩序の要因となっている」アメリカはブッシュ再選によって、問題が「退嬰的で攻撃的なポピュリズムが支配するアメリカそのものにあることを明らかにした」と指摘しているが、このような見方は、フォーリン・アフェアーズ誌に掲載されたジョンズ・ホプキンス大学名誉教授ロバート・W・タッカーと、コロラドカレッジ教授デビッド・ヘンドリックソンによる論文「アメリカへの信頼はいかに失墜したか」(『論座』04・12)とも共通している。

《ブッシュ政権は、安保理が反対してもイラクとの戦争に踏み切るし、アメリカの要求をのまない限り、国連は無力化する運命にあると警告したばかりか、「イラク戦争によって暴君が追放され、イラク民衆が圧政から解放されるのだから、戦争は正当化される」と何度も主張し》て侵攻に踏み切ったが、ブッシュの政策が「原則、公理、精神、行動のすべてにおいて軍事的なものだった」ことによって、《アメリカは、これまで長年にわたって言葉と行動で対抗してきた「ならず者国家」の特質の多くを備え持つようになってしまう。アメリカのパワーの正統性は大幅に形骸化し、イラクでの捕虜拷問事件のケースのように、ときには完全に消失することもある》と述べて、アメリカの正統性の回復のために多国間協調を次のように説く。

《アメリカが世界の希望の象徴であった時代は遠い過去となった。無謀な武力行使によってワシントンの名声は地に落ち、この汚名は今後長くアメリカに付きまとうことになるだろう。いまや世界はアメリカのことを、都合のよいときは国際法をもち出し、そうでない場合には無視し、そうすることが有利な場合には国際機関を利用し、目的への障害になる場合には相手にしない異端者とみなしはじめている。

アメリカは、武力行使が米外交の特徴とみなされてしまうような路線をひた走り、その結果、この国の安全は強化されるどころか、より大きな危険にさらされている。もちろん、アメリカ人は気質的に決定を他人に委ねるのは潔しとしないが、それでも、単独で開始した行動の代価は自分で負担しなければならないことを理解するようになれば、多国間協調スタイルでの行動の利点を認識するだろう。そして、正統性をもつことには多くの現実的利点があるが、正統性を備えもつことの重要性はそのような利点よりもはるかに大きい。アメリカの正統性を第二次世界大戦後に確立した指導者たちは、正統性そのものが本質的によいものであることを理解していた。アメリカのために、そして、平和的な国際秩序のために、アメリカは正統性の重要性を強く認識した路線へと立ち返

るための道を模索しなければならない。》

ブッシュの正統性なき軍事的攻撃性こそ、最も危険な「『ならず者国家』の特質」にほかならないが、ブッシュ再選後のアメリカではもちろん、こうした見解は反ブッシュ的なリベラル偏向として一括りにされていることは想像に難くない。実際、今回の大統領選ほど、「二つのアメリカ」がくっきりと浮き彫りにされ、論者によってその点が指摘された選挙戦はなかったと思われる。たとえば、各論者はこう指摘する。

《出口調査結果をみると人々の分断ぶりがよくわかる。それぞれの政党を支持する人々の実に9割が自党候補に投票し、また白人既婚男性、高所得者、中程度の学歴、宗教的信仰心の厚い人々はブッシュ氏を支持する一方、女性やマイノリティー、高学歴者、若い人々はケリー氏を支持する傾向が明確だった。

ブッシュ支持者はテロとの闘いや道徳的問題を重視し、ケリー支持者は経済状況と職を重視する。国の現在の方向性を肯定する人々はブッシュ支持、否定する人はケリー支持。まさに「二つのアメリカ」である。》(埼玉大教授平林紀子、11/8神戸)

アメリカン・エンタープライズ政策研究所客員研究員の加瀬みきが大統領選に関する文章(『中央公論』04・11)の中で、《ブッシュ氏に対し民主党が抱く反ブッシュ感情は、共和党のクリントン大統領に対する憎しみともいうべき感情に劣らないほど強い。2000年の大統領選挙で勝利を不当に盗まれたと信じている人も多い。国民を分裂させるのではなく、まとめる大統領になる、という宣言とは裏腹に、保守基盤に取り入る政策を強行に押し通してきたことは、民主党側の反発をより激しいものにした》と記していることは、ブッシュ再選後にまで尾を引いているだけでなく、より一層激しく噴出しているようにみえるのが、ハーバード大教授入江昭の論評「感情の季節」(11/29朝日)から窺われる。

《大統領選挙に敗れた後の民主党支持者の反応は、選挙中の共和党の姿勢とも似ていて、きわめて感情的だった。ブッシュ氏に投票した有権者に対する失望、侮蔑、あるいは怒りが各地で見られた。私は仕事と家庭の関係で、ボストンとシカゴをひんぱんに往復しているが、今回の選挙でも圧倒的に民主党を支持したマサチューセッツ、イリノイ2州での知人の感情は、まさに怒りそのものだった。宗教右派の姿勢への怒り、そしてそのような姿勢に賛同してブッシュ大統領を再選させたかにみえる米国有権者への怒りである。特にインターネットに書き込まれたケリー支持者の感情の高まりは、共和党支持者の感情と相通ずるものがある。アメリカ市民が、かつてないほどの数で共和党候補に票を投じたことに対し、怒りを抑えきれないでいる。信仰心や感情に流され、常識のかけらもない彼らが、ブッシュ政権をあと4年も温存させてしまった、という憤りである。

現今の米国は、感情の季節に入ったかのような印象を受ける。これからも、共和党と民主党、あるいは保守派とリベラル派のあいだの感情的な対立は、容易に消え去らないであろう。》

この「感情的な対立」が根底に流れているためか、ブッシュ再選に絶望してあと4年のブッシュ政権に耐えられなくなった民主党支持者が、どの程度の規模かはわからないが、少なからぬ人数でカナダへの移住を希望して申請しているニュースがテレビで放映されていた。森暢平は連載時評（『サンデー毎日』04・11・28）で、ネット上で大統領選でブルー・ステートと呼ばれる民主党が勝った州（共和党が勝った州はレッド・ステート）と、《カナダを併合して「カナダ合衆国」（United States of Canada）にしようという冗談が広く出回っている》ことを取り上げている。ワシントンDC以北の北東部11州、五大湖周辺の4州、太平洋岸3州とハワイ州の計19州がブルー（民主党州）で、《ニューヨーク、ボストン、ロサンゼルス、シカゴなど大都市圏を抱え、リベラルで反ブッシュ色が強い州である。》保守的なレッド・ステートの共和党州は、キリスト教右派の影響力の強さをちゃかして「ジーザスランド」と呼ばれている。

《カナダ通信社電によれば、ブッシュ再選が決まった当日の11月3日、カナダ政府のウェブサイトにある「移住の手引」に、通常の6倍のアクセスがあったという。ブッシュ再選に落胆した米国内のリベラル派が「カナダに移住でも」とアクセスしたからだと言われている。「カナダ合衆国」と「ジーザスランド」の分離案も、ブッシュ政権があと4年続くことに嫌気がさした知識層や若者の仮想逃避と言ったところなのだろう。》

問題は今回の大統領選によって、米国内の都市と地方の亀裂がくっきりと浮き彫りにされたところにある。

《例えば、民主党の連邦上院議員秘書の経験があるテレビコメンテーターのローレンス・オドネル氏は、「アラバマのような田舎の州は、ニューヨークやカリフォルニアからのカネで成り立っている。連邦政府に財政的貢献をしている州（ブルー・ステート）が、貢献していない州（レッド・ステート）に操られているのが米国の現実だ。イラク戦争や社会福祉で、ブルー・ステートが望まない政策ばかり押し進められている」と、都市と地方の不均衡が連邦政府を瓦解させる危険性を指摘する。かつての南北戦争ならぬ、「青赤戦争」の構図が出現しているというのだ。》

保守系の『ワシントン・タイムズ』紙は、「カナダ合州国」と「ジーザスランド」の地図を一面に掲載し、分離が法的に可能かどうかまで論じている。

記事によると、奴隷制をめぐる北部と南部が争っていた時、南北が別の国として分離できるかがしばしば議論になった。しかし、南北戦争終了後の憲法学会では「連邦から離脱はできない」との解釈が主流になったという。

学説はともかく、米国の分裂がさらに進み、都市と地方の意識の差が広がったら、米国の将来は一体どうなるのか。

全米一リベラルな都市と言われるサンフランシスコで見ると、ケリー票が約22万（83％）に対し、ブッシュ票はたったの約4万（15％）にすぎなかった。逆に、農畜産業が主流の田園地帯ではブッシュ支持が圧倒的という場所が多い。例えば、ワイオミン

グ州クルーク郡という小さな選挙区では、ブッシュ氏が2836票(84%)を獲得し、ケリー氏は500票(15%)だった。同じ米国だが、サンフランシスコとワイオミングの小さな郡ではまったく違う価値観が支配しているように見える。

米大統領選の選挙人制度は、完全な人口比例でなく、人口が少ない州に有利にできている。都市住民とリベラル層の不満がこのまま蓄積されていったら、違う価値観を共存させるより、国を二つに分けた方がいいという議論に進まないとも限らない。

価値観の違いは例えば、同性結婚のような問題に象徴的に表れる。

米国の都市部では同性カップルが多いが、制度的に完全な「夫婦」とは認められないため、遺産相続や税金で不利な面が多い。こうした人たちは地道な運動で権利を少しずつ勝ち取ってきた。ところが、キリスト教倫理を重視する保守派は「結婚は男女の結びつきによるものだ」とし、同性結婚を認めない。」

もちろん、米ワシントン・ポスト・コラムニストのエレン・グッドマンのように、ブッシュ再選後の都市リベラル層の落胆した雰囲気を中心に浴びながら、《しかし、地球温暖化から目をそらしても、極点の氷は解け続けている。赤字は子の世代に引き継がれる。そして米国は星条旗の赤、青、白の3色でなく、赤と青に分かれている。／お望みならいいニュースもある。「からし好きの人々にはブッシュ支持者が多い」という調査結果をCNNで見た。世論調査担当者や学者先生、からし、ケチャップ愛好者の皆さん、青組も赤組も、もう終わりにしましょう》(11/11毎日)と呼びかける声もあるが、「神」を掲げる政治と「人間の良識」に訴える政治との分裂の修復は困難、というのが大方の予測である。

ブッシュ陣営の選挙参謀カール・ローブ大統領上級顧問が11月7日、「希望と節度ある社会を実現するためには、理想を目指すべきだ。同性結婚を禁止するため、ブッシュ政権は、結婚を男女間に限定する憲法修正を求めていく」と宣言したように、ブッシュ再選の中核となった宗教右派の期待に応えて憲法改正のみならず、最高裁判事任命で彼らを満足させる右寄りの人事の断行によって、「融和」「協調」よりも「対決」「分裂」が加速されていく気配が漂っている。先の森暢平は、『ワシントン・タイムズ』紙にブッシュ政権に近い共和党幹部がリベラル派の「仮想分離」について、「米国民の主流から外れている人たちが、自分たちの国を造ろうとするのじゃないか。でも、そうしてくれるのなら、次の選挙でも共和党が勝つチャンスが増えるってものだ」とコメントしているのを引用して、《米国の分裂は根深い。2期目のブッシュ政権がその溝を深めていけば、「カナダ合州国」と「ジーザスランド」の分離話も仮想の世界だけでは済まなくなる》と締め括る。

同様に、《民主党支持のニューヨーク、マサチューセッツなど東部および五大湖周辺の各州とカリフォルニア、オレゴン、ワシントンの西部三州の「青州」がカナダに編入され》た「カナダ合衆国」のEメール地図を冒頭に取り上げて、《このままいくとアメ

リカ合衆国がキリスト教右派の牛耳る「神の国」になってしまうと危惧する声も少なくなかった》(『論座』05・1)と報告するのは、ニューヨーク在住のジャーナリスト・作家の青木富貴子である。とどのつまり、米国の「分断線」は米国を「神の国」と認めるか否か、という点に収^{しゅうれん}斂したということだ。「神の国」を認める者はブッシュ支持に行き、認めぬ者はケリー支持に向かった。大統領選の焦点が「神の国」か否かに絞られていったところに、米国民以外の誰がアメリカの今後の興隆を見出すことができるというのだろう。「神の国」主義者の猛威について、こう報告されている。

《もっとも保守的なキリスト教徒であるこの福音主義者の票は、全投票のうちの23%を占め、そのうちの78%がブッシュに投票した。

その結果、一般投票でもブッシュは350万票もケリー候補を上回る票を集めたばかりでなく、同時に行われた上院選挙では共和党議員の数を5議席増やして100人中55人という多数を獲得。さらに下院選挙でも議席を増やして231人(民主党は200人)という共和党支配を手にした。大統領選を勝ち取り、同時に上下両院のマジョリティを手に入れた大統領は1936年のフランクリン・ルーズベルト再選以来であり、共和党では1924年のカルビン・クーリッジ以来80年ぶりになる。

Eメールで送られた「イエスの地」とは、ブッシュの支持基盤であるテキサス、ジョージアなど南部各州から、内陸部のネバダ、ユタ、コロラド、カンザス、オハイオ州のほか、大票田フロリダ州など内側の州である。多くが海外線をもたない内陸部のこれらの州では、果てしなく広がる平原で牛が草を食み、雁が隊列を組んで南の空を目指す。夜明けとともに起きる住民は、外界の軋轢に煩わされることなく自然と親しみ、楽しみといえは教会へ行ってピンゴに興じることくらい。その教会では、聖書の言葉を文字通りそのまま受け取り、天国へ行くには神の言葉を信じなければならないという信仰を当たり前に思う土地柄である。

そんな土地に住む福音主義者は全米で7000万人、アメリカ市民の4人にひとりを数えるというから、たいへんな数になる。

(中略、共和党員は)とくに、2000年の大統領選挙で投票しなかった400万人の福音主義者をターゲットに選挙戦を展開したという。

彼らは教会で投票を呼びかけ、ミサのある日曜日の朝には、有権者登録を勧めるボランティアが教会を訪ねた。投票日の72時間前には電話攻勢をしかけ、ひとりでも多く投票所へ足を運ばせる運動を展開した。教会を中心に集められた組織票がブッシュに勝利をもたらせたのである。》

さて、《政教分離を謳うこの国で、なぜ、これほど福音主義者が政治的パワーを握り、《結束してジョージ・ブッシュを大統領に選んだの》か。裏返せば、ブッシュがこれほど福音主義者の心を掴んだ要因はなんであったのか。青木氏は、ブッシュが《後継者であるような言動を見せる》レーガンとの基本的な違いをこう示す。20年前の再選

時にレーガンは「新しい愛国心」のキャンペーンを掲げて、《神の名のもとに生まれたこの偉大なアメリカの基本であると語り、神がレーガンを選んで、特別の使命のために彼を保護しているとまで説》き、《ソ連を「悪の帝国」と呼んでその脅威を語り、「敵」の攻撃に備えるべきだと訴えて軍事費に何百億ドルという途方もない予算を注ぎ込んだ》ように、ブッシュと似ているが、《「新しい愛国心」や「アメリカの伝統」を説いた元俳優の大統領は新保守主義を標榜し、神に選ばれた大統領を見事に演じたが、ブッシュの方は神に選ばれたことを心から信じているのである。》

レーガンにとっての「神」はレトリック以上のものではなかったのに対して、ブッシュにとっての「神」はそのものであったことが、「１７年前に禁酒していなければ、わたしが大統領になることはなかった。禁酒できたのは、神の思し召しにほかならない」（『ニューズウィーク日本版』０３．３．１２）という言葉に窺われる。「禁酒できたのは、神の思し召し」であり、禁酒によって大統領になれたのだから、大統領になったのも「神の思し召し」であるという論理には、酒を断って《キリスト教に目覚め、それまでの行いを改めて生まれ変わったという》意味あいが込められている。ブッシュにとって「神」がレトリックではなかったように、自身の「生まれ変わり」もそのものであって、レトリックではなかった。だから、《アメリカが対峙しているのはサダム・フセインの衣を着た「悪」だと強弁し、「この点についてわたしの心に迷いはない」と語》ることもできたのである。

アメリカ版『ニューズウィーク』の「ブッシュと神」の特集記事には、《イラク攻撃の是非をめぐる国連の議論が紛糾していた２００３年２月、ジョージ・Ｗ・ブッシュ大統領は朝早く起きてスコットランド出身の宣教師オズワルド・チェンバーズが書いた訓話集『いと高き方のもとに』を読んでいた》と記されているとして、青木氏はこう感想を述べる。

《「この本と現在の状況には、何やら因縁めいたものがある。チェンバーズが死んだのは１９１７年１１月１５日。エジプトに集結するオーストラリアとニュージーランドの兵士たちを、最後まで神の言葉で励ましていたという。その年のクリスマスまでに、兵士たちはパレスチナをトルコから奪回。第一次大戦が終わるとエルサレムはイギリスのものになった。

今また中東で、新たな戦争が始まろうとしている。……チェンバーズは書いている。『苦難に立ち向かう人は無力、闇の中で耐え忍ぶしかない……己を捨て、神に心をゆだねぬかぎり』

教えに従い、その日のブッシュは神に心をゆだねた。テネシー州ナッシュビルで、こう語ったのである。『テロリストたちは……私たちが全能なる神を正しく信仰していることを憎み』、アメリカが神からの贈り物である自由を『全世界の人々に』送り届ける使命を帯びている事実を憎んでいる、と」語ったというのである。

3月19日にイラク攻撃に踏み切る前のあの重苦しい数週間、ブッシュが何を考えていたか教えてくれる貴重なエピソードである。彼は神に心をゆだね、開戦に踏み切る決断をしていたことがここから読み取れるではないか。早起きのブッシュが国務省や国防省の報告でもなく、第一次大戦の時の訓話集を読んでいる姿は、空恐ろしいようにわたしには思える。

さらに、イラク開戦の後、発表になったこんなエピソードもある。「開戦に至る決断を父親のブッシュに相談したのか」という記者の質問に対して、大統領は天を指さし、「神に相談した」と語ったのである。》

「ジャックダニエルと別れ、キリストに出会った」ブッシュは、カール・ローブの指導の下、94年のテキサス州知事選を勝ち抜き、4年後の州知事再選に大勝した直後、「神は私が大統領になることを望んでおられる」ことを確信する。《ブッシュと神にまつわるドキュメンタリーを唯一制作した米国の公共テレビPBSの『フロントライン』》の中で、「ダラス・モーニング・ニュース」紙のウエイン・スレーター記者はこう語る。

「テキサスの州都、オースチンの教会で行われた私的なミサで、牧師は聖書を読み、こう説教したのです。『われわれは、この国を治め、この国を指導する人が必要です。この国にはリーダーシップが必要なのです』

これを聞いたブッシュは『それは私のことだ』と考えたのです。……明らかに、牧師が語っていたのは - これは1998年か1999年初めですが - たんに、次の任期を務める州知事のことを語っていたのであり、アメリカ合衆国の大統領のことではなかったのですが……」

《しかし、ブッシュは「神が私に大統領選に出馬せよといっている。私こそホワイトハウスにふさわしい人間である」と信じ、「神が自分を選んだ」と親しい人間に話したとスレーターは語る。

聖書の言葉や説教などを抽象的な概念として受け取るか、額面通りに受け取るかで、その意味は大きく違ってくる。スレーターはブッシュの語る悪についてこう続ける。

「原理的に、ブッシュは悪魔の存在を信じているのです。抽象的な概念ではなく、また哲学的な概念としてでもなく、そこにあるものとして、触れられるものとして信じているのです。テロリストについて語る時、端的に表れます。彼らのことを地上にいる悪魔として公然と話すのです。本当にそれを信じているから、心の底から出てくる言葉になるのです」》

テロとの闘いで自然に出てくる「善と悪」という言葉は、たとえば次の演説に見出される。「私たちは善と悪の争いの渦中にいる。そしてアメリカは、悪をその名前で呼ぶことを辞さない」(2002年6月1日、陸軍士官学校卒業式祝辞)

「自由と恐怖、正義と残虐は、いつも戦争(の両極)にある。そして私たちは、神がそこで中立ではないことを知っているのだ」(9・11後の議会演説)

「アメリカ国民の善良さと理想主義、そして信仰のうちに力が、奇跡を行う力がある」
(2003年1月28日、一般教書演説)

《ジョージ・ブッシュの演説には宗教的な言葉が洗練された形でうまく使われている。キリスト教の素養のない人間にはおよそ意味をもたない言葉も、実は聖書からの引用であったり、賛美歌や古いゴスペルから引用された言葉だったりする。いわば暗号のように、これらの宗教用語を巧みに交えて福音主義者にメッセージを送っているのである。》

キリスト教大学の超難関校のウイートン大学を卒業した熱心な福音主義者マイク・ガーソンの手でブッシュの演説は書かれており、《この8月、ニューヨークで行われた共和党の全国大会で、ブッシュの使命受諾演説を聞きながら、涙を流す共和党員の姿があった。恍惚としてテキサス訛りの演説に聞き惚れる男女の姿は異様ですらあった。彼らは、マイク・ガーソンが演説のなかにちりばめた暗号の意味をそのまますぐに理解し、大統領が彼らと同じ道徳的価値観をもっていることに深い安堵と幸福を味わった。そして、ブッシュ大統領は同じ宗教的信念にもとづいて重要な決断を下しているから、彼を絶対的に支持すると誓い合うのだった。》

彼らも大統領と同じようにテロの実行者を「悪を行う者」と呼び、テロとの闘いはキリスト教思想にある「正戦」だと信じている。対イラク戦争で大量破壊兵器が発見されなくても、彼らは意に介さない。サダム・フセインという悪を倒したのだから、イラク戦争の意味は十分にあったと判断する。神を信じる大統領が下した判断に間違いなど起こりえないのだ。》

1984年のペンシルベニア大学の調査では、テレビ伝道番組の視聴者は全米で1330万人だったのに、現在の全米の福音主義者が7000万人であることを考えると、その間に5倍以上に膨れ上がったことになる。《テレビ伝道番組の視聴者は、自分が「恵まれていない」と感じていて、伝道師たちの説教に秩序と希望の約束を見出すといわれる。/11月2日、ジョージ・ブッシュに投票した福音主義者たちも自分たちが「恵まれていない」と感じ、キリストの十字架による罪の赦^{ゆる}しの福音を信じて、この世で敬虔な心情と実践を行えば、天国へ行かれると信じる原理主義者である。》

福音主義者のこの発想や論理は、彼らが敵とみなすイスラム原理主義者のそれと全く瓜二つである。「テロの実行者を『悪を行う者』と呼び、テロとの闘いはキリスト教思想にある『正戦』だと信じ」る福音主義者をイスラム原理主義者に置き換えると、イスラム(アラブ)の土地の侵略者を「悪を行う者」と呼び、自爆テロをもって彼らを攻撃することはイスラム思想にある「聖戦」だと信じることになる。「神を信じる大統領が下した判断に間違いなど起こりえない」のは、神を信じるイスラムの権威が下した判断に間違いなど起こりえないということだ。自分たちが「恵まれていない」と感じる福音主義者たちが、「この世で敬虔な心情と実践を行えば、天国へ行かれると信じる」のは、自分たちが「恵まれていない」と感じるイスラム原理主義者たちが、この世で敵に打撃

を与えれば与えるほど、「天国へ行かれると信じる」のと、全く同じである。一方は自爆テロを、他方は大規模な軍事攻撃をもって、やっていることも全く同じである。

《インターネットが普及して国境のないボーダレスの時代に入ると、「恵まれていない」と思う彼らは、さらに「時代に取り残された」と感じるようになり、孤立感を深めて内なる神への信仰を篤くした。時代を先取りするニューヨークやシリコンバレーの市民は、利益ばかりを求める金の亡者で、お高くとまったりベラルだから、彼らとは価値観を共有できないといって嫌悪した。

とはいえ、90年代以来、福音主義者の数が分裂する細胞のごとく膨れ上がったのも、インターネットやテレビ、ビデオ、DVDなどテクノロジーの発展によるものであることは否定できない。各地の福音伝道師は自分の説教をビデオやDVDに録画して発売し、インターネットを通じて信者確保に努めている。なかにはロックコンサートふうの伝道集会を開いて若者を惹き付ける伝道師もいる。

1979年のイラン革命以来、ホメイニ師の説教がイスラム社会に浸透し、アフガニスタンでソ連軍と戦うムジャヒディンという原理主義者を各地で生み出したのは、カセットテープの普及によるものだった。イスラムの若者はホメイニ師の説教を手軽になったカセットで聞くことができたのである。同様に、アメリカ社会の内部でもテクノロジーが原理主義者を生み繁殖させるという現象が起こっていたのである。》

この報告から想起されるのは、「ベルリンの壁」崩壊以降のドイツである。アメリカの内陸部に多く住む福音主義者が、「時代を先取りするニューヨークやシリコンバレーの市民」に対して、「利益ばかりを求める金の亡者で、お高くとまったりベラルだから、彼らとは価値観を共有できない」と示す嫌悪感は、旧東ドイツの住民が旧西ドイツの住民に抱く嫌悪感と共通しているのが感じられる。「恵まれていない」と思い、更に「時代に取り残された」と感じるアメリカの福音主義者は、ドイツ社会で「恵まれていない」し、「時代に取り残された」孤立感を味わっている旧東ドイツ住民なのである。あるいは、イスラム社会で「恵まれていない」と思い、「時代に取り残された」と感じているアラブの若者である。いや、遠くの海外にまで視線を移さなくても、日本の社会にも「恵まれていない」と感じている若者はたくさんいるし、「時代に取り残された」孤立感を深めている引きこもりやニート、フリーターの若者たちは何百万と群れをなしている。

旧東ドイツ住民が旧西ドイツ住民と比較して経済的にも社会的にも「恵まれていない」と感じるのは、収入が3割ほど少なく失業者の多い現状からすれば、当然のことであろう。もちろん、旧東ドイツ住民に限らず、旧西ドイツ住民の中にも経済的に、かつ社会的に「恵まれていない」と感じている者はいるだろう。どんな社会でも、どんな時代でも、「恵まれている」と感じる者が一方にいれば、他方に「恵まれていない」と感じている者が存在している。したがって、「恵まれていない」という感覚のみに焦点を当てても、何も始まらない。しかし、「恵まれていない」という実感に「時代に取り残され

た」という孤立感が加わってくるとなると、この閉塞感は社会的な意味を帯びてくる。「恵まれていない」と思うだけなら、自助努力で「恵まれている」と感じられるようにすればよいということになるが、そこに「時代に取り残された」という孤立感が加わるなら、「恵まれていない」実感は「時代に取り残された」という孤立感に遮られて、その解消は不可能であることが見通されてしまっているからだ。

「恵まれていない」と不遇をかこっている旧東ドイツ住民に対して、わがままであるとか、西側の社会に溶け込もうとしないというように旧西ドイツ住民が思っているとするなら、それはあまりにも、「時代に取り残された」孤立感を深めていく旧東ドイツ住民の閉塞感に無頓着であるといわざるをえない。社会的な環境はいうまでもなく、社会的なシステムや基盤だけでなく、生活のありかたやリズム、考え方など、いわば呼吸の仕方まで全く異なる旧東ドイツ住民が、「ベルリンの壁」崩壊を機に旧西ドイツに組み込まれてしまったのであるから、彼らが「恵まれていない」と感じるのは当然であったし、西側の生存システムに自分たちが適応することをしいられるばかりで、そのシステムが自分たちにむかって開かれているのを感じとれないとすれば、彼らが「時代に取り残された」孤立感を深めていくことになるのは避けられなかった。「二つのドイツ」は依然として解消されていないのだ。

アメリカの内陸部に住む、平原で牛とともに暮らし、「教会へ行ってピンゴに興じる」日々を繰り返す人々と、時代を先取りする金融資本主義の荒波にさらされて、生き馬の目を抜く都会の雑踏の中を全感覚をそばだてながら、たえず走りつづける神経症的な生活に明け暮れている人々とは、旧東ドイツ住民と旧西ドイツ住民との関係がそうであったように、交流が可能な接点はどこにもなかった。各々が完結しているようにみえるなかで、交流そのものが不必要であった。内陸部に暮らす、建国当初の伝統的な生き方を日々繰り返す住民の生活が、それ自体において完結し、自足していたなら、日々の暮らしに支障がないかぎり、彼らが「恵まれていない」と感じることはなかった。先祖はそうのようにして生きてきたからである。旧東ドイツ住民が「恵まれていない」と感じるのは、彼らには比較すべき旧西ドイツ住民の「恵まれている」ようにみえる生活がツネに目の前にあったからだ。

内陸部の住民たちも先祖がそうであったように、自分たちの知らないニューヨークなどの大都会で、自分たち以外のアメリカ人がどんな生活をしているかなどに関心をもたなかったし、歯牙にもかけなかっただろう。だいいち、都会人の生活と自分たちの生活を比較してみること自体が、ありえないことであった。しかし、テレビメディアの急速な発達はそのような彼らの自足した生活に風穴を開けて、自分たちの知らない都会人のきらびやかで変化に富んだ生活を放映することによって、彼らに自分たちの変化の少ない田舎暮らしを「恵まれていない」と思わせることになったし、「インターネットが普及して国境のないボーダレスの時代に入ると」、ますます彼らの「恵まれていない」という

意識は強まり、彼らの今更どうすることもできない境遇に「時代に取り残された」孤立感がにじみだすようになった。そこにくっきりと「二つのアメリカ」が意識として浮き彫りにされているが、どこにも出口をもたない孤立感が「内なる神への信仰を篤く」することになるのは、必然であった。出口をもたない旧東ドイツの住民の孤立感は、まだ彼らの「神」を見出していないことにおいて、より一層際立っているといえるかもしれない。

奇妙ないいかたになるが、内陸部のアメリカの住民は9・11テロにおいても孤立感を深めていた筈である。9・11テロは、そして今後も起こるかもしれないテロは、彼らが嫌悪するニューヨークやシリコンバレーの、「利益ばかりを求める金の亡者で、お高くとまったリベラル」な市民が居住する民主党州の大都市が狙われるだろうからだ。アメリカの内陸部はテロの直撃からも「取り残されていた」のである。しかも直撃されて大被害を負ったニューヨークの人々は、ブッシュが声高に叫ぶテロへの報復に真っ先に反対する人々であった。ノンフィクション作家の高山文彦は連載『アメリカ暗夜行路』（『現代』05・1）の中で、ニューヨークのクイーンズに住むユダヤ人女性に、9・11についてのインタビューを行っている。

（9・11後のグラウンド・ゼロに近い14丁目あたりで）「人が大勢集まっていて、みんながみんな口角泡を飛ばして、戦争をすべきだ、いやすべきじゃない、と議論していた。それがじつにパワフルな光景として私の中に残っています。そのときは、通常ニューヨークではありえない、ひとつのことをみんなで真剣に考える、きれいに見えるくらいエネルギーがあった。」「そうしたなかで、ほんとうに短いあいだだったけど、すごく美しくてきれいな出来事がニューヨークじゅうの人びとに起きてる時期があった。それまでのニューヨークではとても考えられない時間。たとえばエレベーターに乗り合わせた知らない者どうしがおたがいに、いまどうしてる？ 大丈夫かい？ と声をかけあったりして。連帯感というか、おたがいにケアしてあげたいという気持ち - ひとりひとりのところに慈愛に富んだ気持ちが満ち満ちた時間があったの」

「ところが残念なのは、その後急にだれがなにをしても止めようのないはげしい怒りだとか、復讐^{すく}をしてやろうだとか、そんな悪どいほどの凄まじい力が吹き荒れてきて、みんな揃い^{すく}とっていつてしまった。炭素菌テロとかいろいろと起こるたびに、世界中でそれを伝える側も、9・11の傷口をわざと違う方向にえぐって、怒りや憎しみを刺激した。いま起きている軍国主義的なことなんて、私たちは望んでなどいなかったのに。（中略）

9・11のあとに生まれたひとつの雰囲気というのは、おたがいがおたがいと共存しているという実感 - 他者と他者をつなぐ力だった。いつもならニューヨークとアメリカとはつながらないのに、ニューヨークとアメリカがつながり、アメリカと世界とはつながらないのに、アメリカと世界がつながっていた。ところが、その力をまるきりひっくり返して、おたがいとおたがいを結びつける力ではなく、おたがいとおたがいの関係を断ち切る力が働いている。それをとても強く感じています」

《ひとりの無名の市民である》彼女から引きだされる次の言葉の中に、すでに「分断されるアメリカ」が露わになっているのが感じられる。

「まるでいまは永遠に戦争がつづくみたいになっちゃってる。戦争にたいする愛さえ感じられるわ。ブッシュがノー・モア・ウォーと言うのを望むのはナイーブだとは思わないけど、果してブッシュがアメリカという国をほんとうに代表しているのかというと、どうなんだろう。人それぞれに性格があるように、アメリカという国にも性格があるでしょう。それをつくっているのはだれなのか、だれの性格がこの国の性格なんだろうか……私はいまアメリカの性格だとされている攻撃的で軍国主義的な態度は、ほんとうの性格ではないと思う。どこかでねじ曲げられて、ねじ曲げられたものをアメリカの性格だというふうに信じ込まされているような気がする」

「ここでとても大事なことを付け加えておかなきゃいけないんだけど、つい先週、20万の人たちがニューヨークに集まって、ノー・モア・ウォーのデモ行進をしたんです。これはアメリカの歴史上、ひとつの場所にひとつの目的で集まった人数としては最大規模だった。だから、あちらへ持っていこうとする力にたいして、こちらへ引き戻そうとする力もあって、それが拮抗した状態。アメリカの国内でふたつの力がぶつかりあい、一種の戦争が起きている状態になっている。

私自身が見るアメリカは行動の国であるという……考えるまえに行動するという意味なんだけど、なにかが起きたときに反射的に行動しないで、まず一度座って考えて、いったいいまどんな状況に置かれているのかを消化して、というプロセスが必要なのに、悪い癖が出てすぐに行動を起こしてしまった。9・11の衝撃……こころの痛みや悲しみをひとりひとり消化しきれていないのに、復讐という愚かな行動に出てしまって、あの慈愛に富んだ時間やこれほどまで憎悪を抱かれていたのかというショック、愛する人を失った悲しみ……きっとこれからのアメリカにとってかけがえのない経験になったであろうさまざまな感情が置き去りにされ、戦争という行動のなかに振り分けられちゃった」

イラク侵攻の発端となった9・11テロに直撃されたニューヨークの人々が、ノー・モア・ウォーの意思表示をケリー支持のかたちで示したのに対して、9・11テロに直撃されることのなかった内陸部の住民が、イラク侵攻を肯定してブッシュを支持するという一種の捩れ現象がここにはみられる。アメリカを代表してテロに直撃されたニューヨークの人々にまず湧き起こった感情は憎悪ではなく、悲しみであった。悲しみが憎悪を抑えて人々を内省的にし、悲しみを共有する者同士がつながろうとした。そのつながりは世界まで射程に収めようとしていた。反対にテロに直撃されなかった内陸部の住民は、テロに直撃された悲しみと無縁だったので、自分たちの国アメリカが攻撃されたという憎悪に日頃の疎外感を吹き込んで、鬱憤を晴らす熱狂を求めていった。悲しみと憎悪に深く引き裂かれている彼らの双方の感情が切断された状態にあることが、「分断されるアメリカ」にとっての真に深刻な事態ではないのか。 2004年12月30日記

